

## 第 12 回ヒューマニティ関連教科担当教員会議 議事録

日時: 平成 30 年 3 月 26 日(月)11:50~12:50

場所: 日本薬学会第 138 年会 F 会場(ANA クラウンプラザホテル金沢3F 瑞雲1)

出席者: 58 大学 73 名(世話人含む)

配布物: プログラム

(資料 1)出席者一覧、(資料 2)ヒューマニティ関連教科担当教員会議ワークショップ 2017、(資料 3)「医療人養成としての薬学教育に関するワークショップ」、(資料 4)各大学での取り組み事例の紹介、(資料 5)教員会議アンケート結果、(資料 6)教科担当教員中央会議議事録、(資料 7)第 11 回ヒューマニティ関連教科担当教員会議議事録

以下 敬称略

(司会:金城学院大学 大嶋耐之)

### 1 ワorkshop報告

#### (1) ヒューマニティ関連教科担当教員会議ワークショップ 2017 (報告者:金城学院大学 大嶋耐之、資料 2)

2017 年 8 月 25 日の午後、金城学院大学にて 65 名(世話人 7 名を含む)が参加してワークショップを開催した。テーマは「アウトカムをどう評価し、実現させるか」で、SGD では 4 つのアウトカムを用意し、授業の組立から方略、そして評価まで一連の流れを討論して具現化した。初めての試みとして、参加者に地元の御菓子等をお持ちいただくことを事前にお願ひし、短い時間であったが情報交換会で各大学の特色などについて語り合う時間を設けた。事後アンケートからワークショップ、情報交換会ともに概ね好評であった。次回のワークショップ開催時期は 8 月という希望が多く、必要に応じて開催する意見が最も多かったため、検討していく。

#### (2) 日本薬学会「医療人養成としての薬学教育に関するワークショップ」(報告者:北海道薬科大学 村岡千種、資料 3)

2018 年 3 月 7 日、北里大学にて 71 名が参加者して開催された。テーマは「グループワークの評価」で、開催の経緯と今回の趣旨の説明では、これまでヒューマニティやコミュニケーションの教育を考えるワークショップを行ってきたものの、グループ学習の評価について十分に確認できていないため、グループ学習に携わる教員で評価について討議する機会としたとのことであった。

第 1 部「薬学教育とグループワーク」では、「グループワークを行っているか?」、「工夫・苦労していること」、「どのように評価しているか」というテーマでワールド・カフェを実施し、その後、新潟大学創生学部の渡邊洋子先生による講演が行われた。

渡邊先生の講演内容は、グループワークとは、課題解決や問いの探究、小集団で取り組む、大人と子どもの学習方法であるとの考え方のもとでグループワークを用いた学習の大筋やアウトカムとはどういうことかであった。グループワークを通じて学生が学ぶこととしては、汎用的能力を磨くこと、想像力や共感力を身に付けること、コミュニティーに則した議論、という 3 つのポイントがあり、経験や知識が増えるにつれて学べるが高まる。グループワークの対話から得られるアウトカムだけではなく、グループワークの行為そのものから得られるアウトカムも考えながら設定する必要がある。

グループワークの評価の観点には、グループの評価と個人の評価という 2 つがある。グループの評価は、活動の趣旨や目的の理解、グループメンバーの参加の度合い、プロダクトの完成度などの観点から評価をする。一方、個人の場合は、学習者自身が評価によって自分の学びの状況や目標を具現化できたかという観点から評価する必要がある。

「グループワークをやれば主体的に学べるであろう」は誤りであって、グループワークの目的あるいはそのアウトカムをしっかりと考えて授業設計を行わなければ、学生にとっては何を学んだのかを具現化できないような体験になってしまって、結果としてその学習機会が活かされない。

第 2 部はグループワークを活用した授業と評価を考えるグループワークであった。グループの参加者の中で早期臨床体験を実施している方が多かったのをこれをテーマとし、既に取り組んでいる教員の授業設計を雛形とした。討論の中で何度も出てきたのが、なぜグループワークを行うのかという観点から授業設計・評価をする必要があるということである。自分は分かっているつもりでも、グループメンバーから質問を受けることで明確になっていないことがわかり、グループ・個人の何を評価するのかについて、目的、観点、方法、活用の面から考え、授業の中でのグループワークの位置づけを何度も見直す機会となった。

このワークショップで、グループワークの参加者としてグループワークを考えることは貴重な経験であった。議論している場にグループワークのプロセスや個人のプロセスがあり、ファシリテーターがどの様に介入するかについても、体験をもって理解できた。自分自身が担当しているグループワークを設計段階から見直し、学生に有効な学習機会を提供できるようにブラッシュアップさせたい。

## 2 アンケート結果報告(報告者:徳島文理大学 石田志朗、資料 5)

本会議開催に合わせてオンラインで行ったアンケート調査について報告した。

- ▶ アンケート内容:会議の話題に関するご意見 (他大学への質問事項、各大学への取組事例の紹介)
- ▶ 期間:平成 30 年 2 月 28 日～3 月 9 日
- ▶ 回答数:104 名、70 校
- ▶ 回答者が担当している科目は基礎から臨床まで様々で、ヒューマニティ関連科目に携わる教員の専門は様々であった。

- 1) 他大学への質問としては、①ヒューマニティ関連科目の評価方法、②倫理教育のカリキュラムの構築、③アクティブラーニングやヒューマニズム教育の方法や内容について多くの質問が寄せられた。
- 2) 各大学への取組み事例の紹介には、数校から回答があり、この後に紹介していただく。
- 3) 改訂コアカリキュラムに関する意見は、【A 基本的事項について】見直しの意見やこのままで良いとの意見など 15 の意見が寄せられた。【G 薬学研究について】も賛否のご意見が7つ寄せられた。
- 4) ワークショップについては、参加する、日程により参加するがほとんどであった。テーマとしては、ルーブリック、SGD、パフォーマンス等の評価方法、倫理教育の方法について等が寄せられた。また、教員会議の日程等については、日本薬学会期間中ではなくもう少し時間の取れる時期にしてはとのご意見もあった。

## 3 各大学の実践事例の紹介

### (1) 岡山大学

4 学期制、1 コマ 60 分×2 コマ(120 分)で SGD 入門、人体解剖学をリンクさせたヒューマニティ教育を実施している。御献体に触れる人体解剖学は薬学では必須ではないが、生と死の死生観を醸成し、御献体の意志を学ぶ授業として薬学部教員がコーディネートして十数年前から医学部教員の協力の下で開講している。1 年生の授業であるため、これまで種々の問題があったが、医学部教員からの意見を汲みながら改善して昨年は人体解剖学を行う前に御献体の意義や死について SGD 入門で議論した結果、医学部教員から態度面も含めて好評価であった。

3 年からの救急薬学では、自分が救急医療で体験したことや救急の実症例を利用し、死ぬか生きるかという救命医療の現場を学生に解説しながらヒューマニズムについて教えている。2、3 年生では薬学の専門的な臨床についてはほとんど学んでおらず、薬物治療の話もするがメインはヒューマニズム教育である。ICU の患者など実症例を使用するにあたり倫理的な配慮も必要で、患者が特定できないように資料を作るには時間もかかる。しかし、DNAR (Do Not Attempt Resuscitation、蘇生不適応)の症例などは、学生にとって効果があり、DNAR を宣告された重症の患者に対してどの薬を切るかなどについて SGD を行う。災害については、CSCAPPP(災害薬事支援の原則)、災害時のコミュニケーションや薬剤師として行動すべきことを、学生にその患者の背景を基に考えてもらっている。

実症例で行うことが学生にとって反響が大きい。臨床薬学演習は、在宅の患者のところに行って実習後に演習を行うことをしている。命と言うことに一番着目し授業を行っている。(名倉弘哲)

## (2) 九州大学

九州大学は医療系学部が同一キャンパス内にあり、チーム医療教育などを行いやすく医療系統合科目として 3-4 年に看護、薬剤、インフォームドコンセント、臨床 PB を一緒に学ぶ。看護 4 年のカリキュラムがハードなので、看護が加わるのが難しい。2 年生の基幹教育も興味のある他学部学生は聴講可能である。自分が担当する「医療における倫理」が該当し、最初は薬学部学生のみだったが、医学、看護、放射線の学生が聴講するようになった。そこで最初は 180 名の学生を対象に講義のみだったが、そのうち SGD 等を行ってみた。倫理的な項目としては、「動物実験の是非」、「出生前診断」などであり、最初に概念や考えを講義した後に SGD とした。特にグループ分けを決めておらず、近くの 7-10 名が集まってディスカッションする。SGD の間はグループの間を廻って観察している。グループ毎で結果を発表、授業の最後には感想を提出してもらう。それを参考にしながら次の講義の内容を考えている。

出生前診断のテーマでは、この 7-8 年の間、知り合いのダウン症の子どものお母さん(人前で話すことには慣れている)に話をしてもらっている。現実として、出生前にダウン症の診断を受けた 8 割以上が堕胎をして行く現実がある中で、ダウン症児として生まれた時の葛藤、それを乗り越えてポジティブに生きていく姿勢などを話してもらっている。障害児といえども学生と同じような教育を受けており、ダウン症児がお母さんに「生んでくれてありがとう」と言う言葉を発して、学生は、今まで自分の親に言ったことはないとの話をしており、学生にとっては非常にインパクトがあるようだ。これからも続けるつもりである。(島袋隆雄)

## (3) 慶應義塾大学

多職種連携教育として、医学部、看護医療学部、薬学部で医療系三学部合同教育を行い、各学部の学生は在学中に 3 回、この合同教育に参加する。学部の主キャンパスが異なるので、各学部のキャンパスで持ち回りで開催している。1 年入学直後の 5 月に開催する初期教育は日吉キャンパス、中期は看護医療学部の湘南藤沢キャンパスで、後期は薬学部の芝共立キャンパスと医学部の信濃町キャンパスで実施している。中期になるとある程度医学的な知識も付いてくるので、患者の話を聞いてグループワークをすることもできる。後期はミニカンファレンスの情報を基に 3 学部で話し合うなど、非常に医療的なことができる。

初期は互いの面識も知識もない時期であり試行錯誤を繰り返してきたが、2016 年から「謎解きゲーム」を取り入れている。このゲームには推理的な要素、パズルの要素を含み、グループでゴールを目指すことでお互いを知り、コミュニケーション能力の基本である「相手の話を聴くということが出来る」ことを実現している。もともとはゲームを企画・製作・販売している学生サークルのメンバーに医学部 6 年生がいたことに始まるが、現在は、初期教育を受けた学生が中心になって、次の年のゲームを作成するというサイクルができつつある。学生へのアンケート調査では「このゲームのゴールに達するには如何に話をしなければならぬか分かった」という感想があり、嫌でも話をしながら情報共有の大切さを知る機会になっているようである。また、自分が話すのではなく、相手の話を如何に引き出すかといった感想も見られるようになった。この結果は、本年会のポスターで発表する。(横田恵理子)

## (4) 昭和大学

文部科学省「課題解決型高度医療人材養成プログラム」採択事業により、NBM (Narrative-based Medicine) の基盤教育を目的とした PBL チュートリアルを 4 学部連携して実施している。対象は 4 学部(医学、歯学、保健医療、薬学)6 学科の全学生 600 名であり、薬学部生は、1 年、2 年、4 年次に参加する。授業用の教材として、オリジナルの映像を同じキャスト、連続性を持たせたストーリーで作成している。1 年目は在宅医療におけるナラティブ、2 年目は医療倫理/臨床倫理、3 年目は医療人としてナラティブを考える話で、すでに撮影が終わり編集中。今日は最初の 2 つの映像を紹介する。最初のビデオは、祖母の思いに対する感情移入と祖母のイメージを共有する 3 分間の映像で、今日は 30 秒で紹介する。2 年次のビデオは 10 分間である。

このビデオを活用した 1 年次授業は 5 つのステップからなる。Step1 でビデオを見て Step2 で重要なキーワードを検索する。Step3 で議論する問題、祖母の思いや尊厳など、登場人物それぞれの思いについて学生が考えると共に、教員がキーワードを与えて論点を出し、Step4 でプロブレムマップを作成する。最後の Step5 では自分が主人公であったら何をすべきか、自分たちの提案を含めて考え発表する。発表は 2 グループで行い、互いの発表を聴いて自分たちのプロダクトを見直すようにしている。学生が提出する成長報告書をファシリテーターが評価している。

ビデオが各大学で利用可能である。授業に活用したい場合メールでご連絡頂きたい。(倉田なおみ)

#### 4 その他 情報交換

(発表者:徳島文理大学 石田志朗)

倫理教育の教材としてテレビ番組も活用できる。古くは「1リットルの涙」で難病の女子学生の短い生涯について、最近では「コウノドリ」という産婦人科医の番組で、子どもが生まれる一方死産の場合もあり生と死を考えることができる。出生前診断の場面もあり、生むべきか否かの判断の葛藤を考える機会にもなる。

(発表者:東京理科大学 後藤恵子)

日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会に関する情報提供

- ・ 「基礎から学ぶ行動科学」が4月上旬に発行されるので活用いただきたい(配付資料あり)。
- ・ 学会の大会が9月8日、9日に開催される。9日には「地域で行う患者コミュニケーション教育の現状とさらなる発展をめざして」とのタイトルで模擬患者の方も参加される。SPを使った参加型の演習の責任者の方にぜひご参加いただきたい。8日にはアドバンスドワークショップ・ファシリテータ養成セミナーを行う。
- ・ ファシリテーターの養成セミナーには基礎編、実践、応用編があるが、実習の進め方と評価方法を学ぶ基礎編を第3回日本薬学教育学会大会で開催する。

#### 5 連絡事項

(報告者:慶應義塾大学 石川さと子)

資料6は薬学教科担当教員中央会議の議事録である。中央会議議事録には他の科目担当教員会議の情報があるので、他の教員会議の活動やその内容など、関連部分をご参照下さい。また、この会議は薬学教育協議会の下、補助金を頂いて運営している。2017年度はワークショップを開催したが、薬学教育協議会からも年間通して1時間のみではなく、実質的な協議をするように指示されている。

次のモデルコアカリキュラム改訂に向けてのアンケート調査については、薬学教育協議会からの依頼でもある。平成25年度改訂時は、文科省から日本薬学会に依頼があり、コアカリキュラムA、B、Gについて一つのチームで改訂作業を行った。次回の改訂時期、作業形態は不明であるが、医学部、看護学部のコアカリ改訂と関連させるといった動きもある(資料6下から3行目)。その時、次の10年後を考えながら薬学部のコアカリを改訂していくためにも、今から様々なご意見を頂きたい。

#### 6 2018年度世話人について

2017年度に引き続き、以下の7名が世話人を務めることとなった。世話人交代については、世話人会で具体的に協議し、本会議に提案していく。

##### 【ヒューマニティ関連教科担当教員会議 2018年度世話人】

石川 さと子(委員長、慶應大)

大嶋 耐之(金城学院大)

村山 恵子(第一薬大)

廣谷 芳彦(大阪大谷大)

野呂瀬 崇彦(北海道薬大)

石田 志朗(徳島文理大)

吉永 真理(昭和薬科大)

以上